

# バルザックの未完作品とエディションについて

鎌 田 隆 行

**キーワード：**バルザック、19世紀フランス小説、生成論、未完作品、エディション

本稿はバルザックにおける作品生成の考察の一環として、この作家における未完という事象の様々な水準での現れを分類整理し、関係する資料の参照可能性を検討する。特に『人間喜劇』に密接に結びつく時期を中心に据え、現時点でどれだけの原資料がエディションの形で閲覧可能なのか、逆にどこが不十分なのか、情報の整理を試みて今後の課題を明らかにしたい。テキストの永続的な変容可能性を問う生成論にとって未完の問題は本質的であり、一つの形に固着せず生成変化し続けるエクリチュールをめぐる理論的に考究すべき概念であると同時に実践的に検証すべき事象でもある<sup>1</sup>。以下では、理論的な考察を視野に入れつつも、後者の観点からバルザックにおけるこの問題の総合的検証の足掛かりを模索する。

## 1. 作品グループの未完／題名のみ計画

バルザックにおいて特徴的な一つの事象は、複数のテキストを糾合すべき枠組を構想していながら、これが完結しないケースである。以下、この問題の批評的争点を確認した後、エディションの状況を検討し、いくつかの具体的事例を挙げてみたい。

既に1830年代前半にして一社会全体を総合的に描き出す小説絵巻を着想したバルザックは、以後この企図を実現するための計画に腐心し、諸作品の序文等でしばしば明示したように、個別作品の作家ではなく、総合的な作品群の作家としての認知を常に望んだ<sup>2</sup>。もちろん、社会全体の描写という未曾有の計画は、あたかも「原寸大の地図」を作るがごとき不可能の試みにほかならず、その意味で失敗を運命づけられている<sup>3</sup>。どれだけ書いても未完というパラドシカルな機制、原理的な未完がそこにある。しかし、バルザックは無作為にこのような途方もない目的に挑んだのではなく、方法的、体系的な「一なる全体」を書こうと意図し、常に作品をグループ化していくプランを作成、修正していった。バルザックにおいては最初期の習作を除くと作品の制作は基本的に刊行を前提としているため、これらのプランは刊行戦略上の設計図でもある。作成された計画のうち、かなりのものは痕跡が残されており、刊行の形で実現したかどうかを検証可能である。グループ化の計画は大抵、収録されるべき具体的な作品のリストを伴っており、そこには題名のみで消え去った泡沫計画も多く観察される。また、構想の大幅な変化によってグループそのものが散霧消してしまうこと

<sup>1</sup> 未完をめぐる理論的考察については特に次の著作を参照のこと：Louis Hay (dir.), *Le Manuscrit inachevé. Écriture, création, communication*, Éditions du CNRS, 1986.

<sup>2</sup> 次の拙論を参照のこと：「バルザックにおける『全集』と『知』」, 真野倫平編『近代科学と芸術創造——19世紀～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』, 行路社, 2015, p. 261-279.

<sup>3</sup> Franc Schuerewegen, « Paratexte et complétude. Notes sur l'Avant-propos et sur la Préface de *Pierrette* », in Claude Duchet et Isabelle Tournier, *Balzac. Œuvres complètes. Le « Moment » de La Comédie humaine*, Presses Universitaires de Vincennes, 1993, p. 137.

も一再でない。したがって、作品グループの未完の問題と題名しか残されていない個別計画の問題はバルザックの資料体においてほぼ一体化していると言える。そもそも、『人間喜劇』自体がグループ化の未完を体現しているものであって、「1845年のカタログ」における一覧と『フルヌ修正版』に付されたプラン（前者の縮小版）がその最終形態を示すものとすれば<sup>4</sup>、ここで多数の作品計画が実現せずに終わっている。「1845年のカタログ」記載の137作品中、50作品が未了（ないしは未着手）であった。

このように『人間喜劇』とそれに関連した各種作品グループの発展や途絶はバルザックにおける創造行為の核心をなすため、以下で見るように重要な先行研究の対象となっている。

まず特筆すべき、高山鉄男による著作はバルザックの中絶した小説作品を主題とし、1829年から1842年の時期に限定した上でその精査を行っており、バルザックにおける未完の問題に関して最重要の参照先となっている<sup>5</sup>。同書は『人間喜劇』の準備期に多数の作品計画が他の（完成）作品群にテーマを供与して途絶、消滅したプロセスを多面的に明らかにしており、構想の途中で放棄された諸計画がいかに『人間喜劇』の形成に創造的に寄与したかを跡付けている。

この分析手法は、後の「マクロジェネティック」における作品グループの生成過程の考察の先駆けとみなすことができる。実際、1980年代以降のバルザック研究において、『人間喜劇』に至る諸作品の統合化のプロセスの問題はマクロジェネティックの特権の対象となった。というよりも、『人間喜劇』をめぐるグループ化と未完結の問題を再定義する批評的営為の中からマクロジェネティックのアプローチが構築されていったと言うべきであろう。現在読まれる『人間喜劇』は100作品ほどの物語を糾合しているが、それらは二十年弱の間にバルザックがたえず書き継ぎ、きわめて流動的なグループ化の試みを繰り返しながら統合を進めた結果である。『人間喜劇』とはしたがって、諸作品の逐次的な増減、入れ替え、組み直し、再統合といった举措が果てしなく繰り返される中で成立していった作品群であり、無限の組み換え可能性というダイナミズムがその基底にある<sup>6</sup>。かくして、決して完結して閉ざされることがない、創造的な組み換え可能性を内包する永続運動としてのバルザックのエキリチュールを問うべく、個々の作品レベルに下りるよりも作品グループの構想と実現という観点から『人間喜劇』の成立過程における複雑な運動を考察することがマクロジェネティックの主目的となる。ステファンヌ・ヴァッションはこれを「印刷物の生成論」として方法論的に発展させた<sup>7</sup>。

ただし、何にもまして具体的な個別作品の執筆こそが作品グループの構想や編成の重大な変容の契機となる機制がそこで十分に考察されていなかった点は指摘しておく必要がある

<sup>4</sup> Roger Pierrot, « Les enseignements du Furne corrigé », *L'Année balzacienne* (以下 AB と略), 1965, p. 291-308.

<sup>5</sup> Tetsuo Takayama, *Les Œuvres romanesques avortées de Balzac (1829-1842)*, The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1966. 以下、本稿は多くの論点において同書に負うところが大きい。

<sup>6</sup> Claude Duchet, « Notes inachevées sur l'inachèvement », in Almuth Grésillon et Michaël Werner (dir.), *Leçons d'écriture. Ce que disent les manuscrits*, Minard, 1985, p. 245-246.

<sup>7</sup> Stéphane Vachon, « De l'étoilement contre la linéarisation : approche macrogénétique du roman balzacien », in Juliette Frølich (dir.), *Point de rencontre : le roman*, Kults skriftserie n°37, 1995, t. II, p. 203-204.

う。バルザックにおける全体計画は、実地に移された執筆プロジェクト（細部）の変容を回帰的に被ることによって修正され続けていく。書くことによって新たな可能性が顕現するがゆえに当初のグループ化の計画は裏切られ、修正や新たなプランが要請される。こうしたミクロレヴェルとマクロレヴェルの相互干渉的關係の下で一つの創作の挙措が次なる可能性を発動させ、そのダイナミズムの連鎖が開かれた作品群をたえず次なる生成運動へと突き動かしていくのである<sup>8</sup>。

こうした研究動向を踏まえた上で、バルザックの創作活動の中で消滅したグループと題名だけの作品（群）の創造性の役割を再考するための源泉資料を以下、検証する。この問題については刊行一覧とプランの確認が必要になる。まず、刊行記録の整理（＝刊行物の生成論）は飛躍的に進展した。バルザックの刊行の営為の一覧をステファンヌ・ヴァッションが子細に跡付けており、この決定的な貢献によって基本的には作品の出版の有無が確認可能である<sup>9</sup>。

これに対し、プランの参照に関しては依然として大きな課題が残されている。バルザックが構想し続けた作品グループの計画を記載した資料は多岐にわたる。最も重要なのは、創作ノートである *Pensées, sujets, fragmens, Notes sur le classement et l'achèvement des œuvres* (Lov. A159), *Notes prises par Balzac pour ses romans* (A158), *Recueil de couvertures de manuscrits et titres d'œuvres. Notes diverses. Manuscrits autographes* (A202)<sup>10</sup>, そしてバルザックが折々に発表した作品カタログに記されているリストである。これに加え、書簡での言及や草稿のタイトルページ等に記されたケースも考慮に入れる必要がある。

まず、創作ノート集については、全般にマクロジェネティック以後の成果を活かした転写版が待たれる状況である。*Pensées, sujets, fragmens* はバルザック自身が「アルバム」と呼んで重用した総合的な創作メモの帳面で、円熟期の1830年～47年に用いられた。しかし、その現物はロヴァンジュール子爵の膨大な蒐集作業から漏れ、調査が遅れた<sup>11</sup>。所有者の一時的な許可による閲覧や写真撮影に基づき、二つのエディションが編纂されたが<sup>12</sup>、原資料の

<sup>8</sup> この問題については次の拙論を参照のこと：« Enjeux et paradoxes de la composition hétérogène chez Balzac », 松澤和宏編「統合テキスト科学の構築」第3回国際研究集会報告書、名古屋大学、2004, p. 49-57 [和文原稿を併載：「バルザックの混成的執筆法の賭金と背理」, p. 147-153]。

<sup>9</sup> Stéphane Vachon, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac. Chronologie de la création balzacienne*, Presses Universitaires de Vincennes / Presses du CNRS / Presses de l'Université de Montréal, 1992. ただし、同書が刊行されてから30年近く経過しており、情報の更新が必要な側面もある。バルザックの「全」刊行作品の年代を一覧化するのであれば、その前提として、『人間喜劇』の作者に帰せられるかどうか議論の余地がある匿名・変名による記事や作品について、帰属の有無の確定が必要である。従来の諸説の再検討が待たれる。例えば次の論文を参照のこと：Bruce Tolley, « Les œuvres diverses de Balzac », *AB1963*, p. 31-64.

<sup>10</sup> 括弧内はロヴァンジュール文庫における整理番号を示す。これら3点については以下、整理番号によって言及する。なお、本稿では邦題が定着していない作品や資料等は原題の表記で示すこととする。

<sup>11</sup> ロヴァンジュール文庫には同資料の筆写版とファクシミリ版が保管されている（それぞれA181, 182）。しかし、どちらも資料本体の紙片の順番を反映しておらず、不完全な複製にとどまる。

<sup>12</sup> Balzac, *Pensées, sujets, fragmens*. Avec une préface et des notes de Jacques Crépet, A. Blaizot, 1910 ; Balzac, *Pensées, sujets, fragmens*, in *Œuvres complètes*. Édition nouvelle établie par la Société des Études Balzacienes, Club de l'Honnête Homme, t. 24, 1971, p. 659-723 [1<sup>ère</sup> éd., 1963]。

構成に対する詳細な分析がなされていないため、不明な点も少なからず残っている<sup>13</sup>。ところが、エルヴェ・ヨンの2011年の調査記録によれば、この帳面は一部の関係者が参照可能な状態となっている模様である<sup>14</sup>。そうであれば、今後、バルザックの創造の核心にありながら謎が多く残る資料体について、根底的な情報の刷新と校訂版の準備が期待できよう。

他の3点はロヴァンジュール文庫にて現物が参照可能であるものの、いずれも転写版が存在していない。*Pensées, sujets, fragmens*の補完的な役割を担ったA159は1841年～44年頃に用いられ、特に、『人間喜劇』の増補版の計画を記した「1845年のカタログ」の準備に寄与している。いっそうの精査が待たれるゆえんである。他方、A158とA202はバルザックが生前に用いていた未綴の創作メモ群を編纂者が集積したもので、それぞれ資料体の題名は編纂者によって便宜的に付けられたものである<sup>15</sup>。したがって、時期も用途もさまざまに異なるメモが雑然と束ねられ、混沌とした資料体を形成しており、利用は容易でない。こうした資料には題名、シリーズ名のプランのほか、刊行に関する諸情報、シナリオ、登場人物リスト、スケジュール案などが含まれている。

同様に、作品草稿のタイトルページもまた、当該作品のシナリオや登場人物に関するメモ等とともに、グループ化のための題名リストがしばしば書き込まれている多層的な場である<sup>16</sup>。プレイヤード版の*Histoire du texte*で内容が転記されている場合もあるが、網羅的な記述がなされることは少ない<sup>17</sup>。転写がなされている場合も、当該作品の資料として収録されているので、記載されている作品グループ名（ないしは未完、未着手の作品題名）からの逆引き検索ができない。創作メモとともに、転写版の作成や総合的な分析によって、これらの情報を常に他の資料と照合できるようインデックス化を行うことが重要となろう。

一方、書簡もまたバルザックが作品群の構想を記したり（とりわけハンスカ夫人への手紙のケース）、刊行契約の詳細を折衝したりするなど（対・書店主、編集者、仲介業者<sup>18</sup>）、作品計画の発露や変容の痕跡がとどめられた場であり、上記4資料体やタイトルページと比較対照すべきデータとなる。バルザックは創作メモに稀にしか日付を記さないため、書記年代の確定においてこの対照作業が特に肝要である。ロジェ・ピエロの編纂による『ハンスカ夫人への手紙』と『書簡集』はそれぞれ1990年、2006年～17年に新版が刊行され、書簡の相手や年代に関して必要な改訂が加えられた<sup>19</sup>。特に後者は書簡の年代や交信相手（これらの記

<sup>13</sup> René Guise, « Les mystères de *Pensées, sujets, fragmens* », *AB1980*, p. 147-162.

<sup>14</sup> Hervé Yon, « Les ambitions encyclopédiques de Balzac. Une page, partiellement inédite, de *Pensées, sujets, fragmens* », *Le Courrier balzacien*, n°14, 2011, p. 5-8.

<sup>15</sup> これらの資料体の全容を記述した研究は存在していない。A202に関しては、イザベル・トゥルニエが次の論文において作品の題名の観点から重要な分析を行っている：Isabelle Tournier, « Titres et titrage balzaciens. Autour d'un dossier peu connu du fonds Lovenjoul », *Genesis*, n°11, 1997, p. 41-60.

<sup>16</sup> 文字通り当該作品の草稿の表紙として綴じられているケースが一般的だが、前述の創作メモ群に紛れ込んでいるものも見られる。

<sup>17</sup> Balzac, *La Comédie humaine*. Édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol. 以下 *Pl.* と略する。

<sup>18</sup> 前述の通り、バルザックの作品計画は刊行戦略と不可分であり、これらの関係者との交渉が作品制作の展開を左右する点において「共作」的な相が見られる。たとえばエッツェルとの協同的な出版作業の創造性については次の著作を参照のこと：私市保彦『名編集者エッツェルと巨匠たち——フランス文学秘史』、新曜社、2007。



載がない保存紙片も少なくない)の大幅な見直しを行っている。この改訂は書簡との関連づけによって年代推定を行っている他の資料の位置づけに影響を及ぼすことになる。

また、バルザックが構想を進めた作品グループはしばしば序文等で告知され、さらに刊行案内の体裁で読者に発表されている。既出の「1845年のカタログ」が最も有名だが、『人間喜劇』が成立するまでの過程で既に複数の子細なカタログが刊行されている。たとえば、『セザール・ピロトー』(1837年12月刊)の末尾に付された「デロワのカタログ」は『人間喜劇』への決定的な発展段階を証するプランとなっており、またこれと並行して途絶することになる『コント・ドロラティック』の計画の痕跡をとどめ、過渡的状态を現している<sup>20</sup>。これについてはティエリー・ボダンによるファクシミリ版が存在しており、閲覧が容易である<sup>21</sup>。近年はフランス国立図書館のサイト「ガリカ」で多くの版本が閲覧可能になっているが、再版も含めると膨大な点数になるバルザックのエディションのうち未対応のものが少なくないため、ボダンの試みの延長上に、印刷された作品カタログの情報の集積が待たれるところである。

こうした関係資料は、バルザックの作品グループの未完のダイナミズムを創造的展開の相のもとに跡付けることを可能にする。たとえば、その執筆活動の最初期では、1824～25年頃に構想が進んだ『生彩フランス史』の計画が重要である。若きバルザックが歴史小説を志し、のみならず連作形式による作品の構想を抱いていたことを示すものとしてしばしば引用されるが、実際に残されているのは数編の中断作品や断片のみである<sup>22</sup>。高山鉄男が詳述するように、壮大な歴史小説の計画は後に同時代小説の連作というコンセプトへと移行することになり、とりわけ軍隊小説が両者を媒介する存在として機能している。バルザックの小説の描写対象は、遠く離れた過去の歴史から、ナポレオン時代の社会風俗を介して、同時代(王政復古期、七月王政期)の社会や心性の問題へと移行し、『風俗研究』の豊富な作品群を準備することになるのである<sup>23</sup>。たしかに、最終的に『人間喜劇』に所収された『軍隊生活情景』中、完成作品は『ふくろう党』と『砂漠の情熱』のわずか二編のみで、それ以外は全

<sup>19</sup> Balzac, *Lettres à Madame Hanska*. Textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol. ; Balzac, *Correspondance*. Édition établie, présentée et annotée par Roger Pierrot et Hervé Yon, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006-2017, 3 vol.

<sup>20</sup> 1836年、デロワらのコンソーシアムとの契約により、同一の出版元によるバルザックの決定版エディションの刊行計画が加速化され、このカタログでその総合的展望が示された。後の『人間喜劇』(この段階での名称は『社会研究』だが、同カタログには総題の記載はない)に関し、『風俗研究』6情景のプラン(既刊3情景と新規刊行予定の3情景)、『哲学研究』30巻(内10巻は新規刊行予定)の内容が紹介されている。ただし『分析的研究』は記載されていない。一方、「単独作品」や「印刷中の作品」という区分が設けられて11作品が記されており、作者によるカテゴリー分けの試行錯誤の状況を示す。『コント・ドロラティック』については、既刊の三輯と刊行予定の二輯が記されている。Cf. Stéphane Vachon, « La gestion balzacienne du classement : du "catalogue Delloye" aux *Notes sur le classement et l'achèvement des œuvres* », *Le Courrier balzacien*, n°51, 1993, p. 1-17.

<sup>21</sup> Thierry Bodin, « Le catalogue des œuvres de Balzac à la fin de 1837 », *Le Courrier balzacien*, n°47, 1992, p. 25-31.

<sup>22</sup> Balzac, *Œuvres diverses*. Édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990 et 1996, 2 vol, t. II, p. 307 *sqq.* 前述のA158にはこの時期のプランも含まれている (*ibid.*, p. 1367).

<sup>23</sup> Takayama, *op. cit.*, ch. 1.

て計画段階の題名に過ぎず、他の後半二情景（『政治生活情景』、『田園生活情景』）と同様、十全な発展を見なかった連作シリーズとして理解されるのが通例である。しかし、「軍隊もの」の枠組はバルザックの小説の創造の源泉として重要な役割を果たしている。実際、早くも1830年前後、作家が『ラ・モード』に寄稿した作品において軍隊小説の構想は *Souvenirs soldatesques* というカテゴリー（副題として記載）で姿を現している。後の『軍隊生活情景』の先駆けとなるコンセプトだが、関係作品は『エル・ヴェルデュゴ』（1830年1月）、『アデュー』（同年5～6月）の二作品のみで、いずれも『哲学研究』に移行していったため、作品グループとしては消滅した。だが例えば、『アデュー』は小品ながらも、ヒロインのステファニーの精神的錯乱を主題とし、幼馴染のフィリップ・ド・シュシーが彼女の不幸の契機となったベレジナでのナポレオン軍敗走の場面を再現することで正気を取り戻させるという大胆な筋立てを持つ。ショシャナ・フェルマンが指摘したように、ここでは男性優位の社会に置かれた女性の狂気が抑圧者たちを告発しており、作品の射程は同時代のジェンダーの問題にも及んでいる<sup>24</sup>。この作品が『私生活情景』を経て『哲学研究』に収録されたこともその潜在的な意味作用の広がりを示していると言えよう。「軍隊もの」は社会全体に関わるテーマを持つ複数の作品の揺籃の場でありながら、逆にそれらの作品が豊かな多義性ゆえに他のグループへと移行、離脱したことから、一グループとしては先細りしてしまったのである。

別の例として、『風俗研究』成立期に見られるサブカテゴリーの構想の明滅もまた興味深い。1832年12月の『コント・ドロラティック』第一輯の第二版および1833年1月の『ルイ・ランベール』に付されたカタログにおいて、『私生活情景』、『社交界生活情景』、『村落生活情景』からなる『風俗研究』のプランが示された<sup>25</sup>。『社交界生活情景』、『村落生活情景』の名称はほどなく消滅してしまうが、『パリ生活情景』や『地方生活情景』、『田園生活情景』へと発展的解消を遂げたものと見る事が可能である。他方、『ルイ・ランベール』による告知で『社交界生活情景』に含まれる予定になっていた『女性研究』（原題では複数形）は、1832年6～9月に着想された連作構想で、1833年春に消滅しているが、これ自体、単作の『女性研究』（単数形）を起点として『風俗研究』のグループ化へと橋渡しを行う役割を担った<sup>26</sup>。これらの事例のように、バルザックにおける作品グループの未完や消滅という事象を蹉跎という側面から見るのではなく、複数の主題の着想、再考、転移といった動的な創造行為の起点や結節点として再評価することが枢要となろう。

こうした作者の壮大な制作の挙措の中で多数見られるのが、題名や短い構想メモだけが残された作品計画である。さしあたりこれを「題名の提示のみで本文の執筆実体を伴わない作品計画」と定義づけ、本文が多かれ少なかれ書かれた途絶作品（次項）とは区別を行うこと

<sup>24</sup> ショシャナ・フェルマン『狂気と文学的事象』、土田知則訳、水声社、1993、p. 219–249。しかし、そうであればこそ、フェルマンが無視している歴史性、ナポレオン時代という背景設定は極めて重要である。男性原理を敷いたナポレオン軍の潰走と男性原理そのものの機能不全が作中で重ね合わされている点が看過されているのはフェルマンの論考の重大な欠陥であろう。

<sup>25</sup> Stéphane Vachon, « La gestion balzacienne du classement : du “catalogue Delloye” aux *Notes sur le classement et l’achèvement des œuvres* », *op. cit.*, p. 5.

<sup>26</sup> Henri Gauthier, « Le projet du recueil *Études de femme*. Un essai d’architecture de l’œuvre balzacienne », *AB1967*, p. 115–146 ; Takayama, *op. cit.*, p. 98–99.

とする<sup>27</sup>。もちろん、題名やメモもまたエクリチュールを構成しているので、「書記的な実体がない」わけではない。むしろ何らかの書記実践があるからこそ我々がその痕跡を捉えるに至っているのである。これとは異なり、バルザックが歓談などの場で口にしたとされる作品構想など、書記的な痕跡を伴わず間接的に情報が伝わっているものについては、その存在の真偽が実証的に確認できないので慎重に扱う必要がある。

ロヴァンジュール子爵による浩瀚な *Histoire des œuvres de H. de Balzac* には完成作品および未完作品の題名を統合した一覧が挙げられており、貴重な情報源となる<sup>28</sup>。高山鉄男の著作と対照しながら該当するケースを跡付けると、100件以上の幻の小説作品の題名が確認できる。これらは単独で生起・消滅するばかりでなく、カップリング、横滑り、融合、分裂など複雑な事象を惹起している場合が少なくない。その全容の整理と、他方でパラテキストとしての詩学的な機能の考究が必要である。

## 2. 冒頭断片

次に注目したいのは、バルザックによる小説冒頭句の執筆の頓挫を示すドキュメントである。実際、作品の冒頭部分はテキスト外からテキスト内への導入を図る戦略的な場であり、詩学的な難易度の極めて高い場である。多くの作家において、書き直しが最も多く行われる箇所が作品冒頭部であることは、残された生成資料によってよく知られている。バルザックに関して確認できる最も古い当該資料は、最初期の習作『ファルチュルヌⅡ』に遡る<sup>29</sup>。本格的な制作段階に先立って詳細なプランを設定せずに書き始めるバルザックにとって<sup>30</sup>、小説冒頭部の執筆時は作品をいかに方向づけるか、そしてそれを読者にいかに提示するかが問われる緊張度の高い瞬間であり、途中でペンが止まって途絶に至る事象は稀ではない。

こうした紙片は二種に大別できる。一つは一般に *faux départ* と呼ばれるもので、作者が作品の冒頭部分を構築するにあたって試作段階で反故にしたヴァージョンである。小説の冒頭句の詩学の問題を論じたアンドレア・デル・ルンゴは、*faux départ*（偽の冒頭）の語は「完成した」テキストに寄与した「良き」冒頭（「成功」し、後続部分へとつながった冒頭部）との目的論的な対比に由来しているため、*commencement interrompu*（中断された冒頭部）の語が望ましいとしているが、次に見る冒頭のみで放棄された作品（*commencement abandonné*）との区別は維持すべきとしている<sup>31</sup>。ロヴァンジュール文庫所収の『人間喜劇』関連資料に関して我々が調査を行ったところでは、26件の資料体でこうした断片が見出され

<sup>27</sup> ただし、本文の執筆が行われたにもかかわらず当該ドキュメントが消失したケースも想定しうる。バルザック自身がたびたび記している『意志論』は、本人の言を信じればその顕著な例であり、この問題については留保が必要である。

<sup>28</sup> Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul, *Histoire des œuvres de H. de Balzac*, Slatkine Reprint, 1968 [1<sup>ère</sup> éd., Calmann Lévy, 1879], p. 329 *sqq.*

<sup>29</sup> Roland Chollet, « À travers les premiers manuscrits de Balzac (1819-1829). Un apprentissage », *Genesis*, n°11, 1997, p. 24.

<sup>30</sup> 上掲の拙論「Enjeux et paradoxes de la composition hétérogène chez Balzac」を参照のこと。

<sup>31</sup> Andrea Del Lungo, « La répétition du commencement. Sur les “faux départs” inédits de *La Recherche de l'Absolu* », in Jacques Neefs (dir.), *Balzac, l'éternelle genèse*, Presses Universitaires de Vincennes, 2015, p. 153-154.

た<sup>32</sup>。その中では『トゥールの司祭』に見られる16バージョンの書き直しが最多で、続いて『セザール・ピロトー』が9バージョン、『従妹ベット』が8バージョンである。

こうした場合、バルザックは同一の紙葉で当該箇所を書き直すことはせず、新たな紙葉を用いて新バージョンの作成を試みている。反故となった紙片は、同一作品ないしは他の作品の草稿として、あるいは封筒代わりとして再利用されることが多い。もっとも、それ以外に廃棄された冒頭断片が多数存在した可能性もあながち否定できない。古文書のいわゆる「紙背文書」に似て、反故紙が別の用途に転用され、保存されているがゆえに我々が知るところとなっているのだ。同一作品ないしは他の作品の草稿内に見出される冒頭途絶部分には作者によって入念に抹消線が加えられている場合が多く、それゆえ解読は容易でない。デル・ルンゴが推定するように、バルザックは反故紙片を裏返し、さらに上下を逆にして入稿原稿として再利用する時点で抹消を行っていたと考えられる<sup>33</sup>。これについて物質的傍証を挙げておくと、入稿原稿以外の場、たとえば書簡の封筒として再利用された紙片に見られる冒頭断片には抹消がなされていない。自らの執筆の労苦を交信者（多くは愛人のハンスカ夫人）に誇示するのが目的だからである<sup>34</sup>。

これらの断片はプレイヤー版に転載されている場合もあるが、網羅的ではない<sup>35</sup>。準＝生成版と評されることもあるプレイヤー版において<sup>36</sup>、作品ごとの生成資料の提示方法が一貫していないことはしばしば指摘されるが、ここにもそうした問題が見て取れる。デル・ルンゴは『絶対の探求』の未掲載の冒頭断片を提示し、分析を行っている<sup>37</sup>。こうした個別研究や新しいエディションにおいて転写版——書き出しの詩学、語りのヴァリエーションの問題の考究へと開かれた資料体——が整備されていく必要がある。

第二のカテゴリーは、冒頭部分のみで途絶し、以後発展を見ることのなかった作品である。プレイヤー版『人間喜劇』では最終巻の第12巻に« Ébauches rattachées à *La Comédie humaine* »という項目が設けられ、完成していれば『人間喜劇』に属したはずの25作品の途絶紙片が収録されている<sup>38</sup>。これら断片群が詳細な解説を伴ってエディション化

<sup>32</sup> 原題のアルファベット順に示すと次の通り。『ソーの舞踏会』、『ベアトリクス』、『従妹ベット』、『セザール・ピロトー』、『夫婦財産契約』、『トゥールの司祭』、『アルシの代議士』、『ランジェ公爵夫人』、『呪われた子』、『現代史の裏面』、『フェラギウス』、『ルイ・ランベール』、『鞭打つ猫の店』、『田舎医者』、『神と和解したメルモス』、『二人の若妻の手記』、『家庭の平和』、『ゴリオ爺さん』、『ラ・ラブイユーズ』（『兄と弟』）、『絶対の探求』、『セラフィタ』、『娼婦盛衰記』（第一部、第三部、第四部）、『カトリヌ・ド・メディシス』（『二つの夢』、『リュジエリ兄弟の秘密』）、『優雅な生活論』、『ヴァンデッタ』、『老嬢』。『アルシの代議士』は本編自体が未完であるが（後述）、その生成資料は途絶した冒頭断片を含んでおり、便宜上、このカテゴリーに含める。

<sup>33</sup> Del Lungo, *op. cit.*, p. 155-156.

<sup>34</sup> たとえばハンスカ夫人宛の封筒に見られる『ゴリオ爺さん』冒頭部がそうである：Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, *op. cit.*, t. I, p. 205 ; *Pl.*, t. III, p. 1209.

<sup>35</sup> 例えば既に挙げたケースでは、『トゥールの司祭』と『従妹ベット』は全て転写されているが（*Pl.*, t. IV, p. 1175-1177 ; t. VII, p. 1240-1242）、『セザール・ピロトー』については9点中3点のみで、残り6点は包括的に記述され、ヴァリエーションのみ取り上げられている（t. VI, p. 1120-1121, 1133）。他方、書簡の封筒として転用された紙片については、上記の書簡集に転写または注記されている。

<sup>36</sup> Stéphane Vachon, « “Et ego in Chantilly”. Petit essai de genèse de la génétique balzacienne (les éditions) », *Genesis*, n°13, 1999, p. 146.

<sup>37</sup> Del Lungo, *op. cit.*, p. 153-158.



されたインパクトは大きく、『人間喜劇』が形成される上で着手されながらも早々に中断され、ついに再開されることのなかった断片が多数存在していることが再認識される契機となった。フランク・シュルヴェーゲンはこれらを単なるドキュメントではなく、「十全な作品」として読むことの可能性を提唱している<sup>39</sup>。しかしそのことは逆に、校訂版において未完作品を未完の運動そのものとして受容することの難しさを示しているとも言える。

途絶紙片はバルザックにおける作品構想の胚胎のあり方を考察する上でも貴重な素材となる。最も有名な途絶紙片の一つである *La Bataille* のケースは徴候的である。『軍隊生活情景』に属するはずであったこの作品は、題名の数種のヴァリエントを伴いながら、バルザックの創作ノート、書簡等において盛んに言及され、作者が特に重視した計画であったことがうかがえる。だが、作者が労苦を重ねて進めたと言われるこの作品について、実際に残された執筆紙片は意外にもごく僅少である。「第一章 グロース＝アスペルン」と題され、「1809年5月16日、一日の半ば頃に」というわずか一文にも満たない冒頭句が確認できるに過ぎない<sup>40</sup>。ことによると、バルザックが書き連ねた（かもしれない）草稿が消失した可能性も排除できないが、題名と制作状況を語る私的な言説の横溢と、ほぼ最小限のテキストのみの存在は、この作家において書記化以前の段階の構想作業が持つ重要性を表している。こうした構想作業の間接的な痕跡を生成論的分析はどう繰り込んでいくべきか。資料的な論拠という歯止めを外せば恣意的なコメンタリーを誘発する危険があり、逆に明白な痕跡の存在のみに限定するならば、残された紙葉は解釈の対象としてはあまりにも断片的すぎる。このジレンマの解決は生成論の一つの方法論的課題である<sup>41</sup>。

そして何よりも、途絶断片はバルザックにおけるテキストの発展のメカニズムを解明する上で重要な分析対象となる。構想段階を経て書記化へと至り、書き始めた小説の冒頭部分で作者はいかなる困難に直面し、執筆行為が停滞するのか。テキスト外からテキスト内への開口部という試練の場、一つの関門を超えられなかった試作群と、その関門を超えた「完成」作品群（中には何らかの中断を経た作品も少なくない）ではエクリチュールの進展のメカニズムはいかに異なるのか。これらの検討によって、執筆の停滞／再開の機序を考察することが可能となろう。

以上のように、faux départ と途絶作品の二種の紙片は、バルザックのエディションを本格的に刷新する際に網羅的に取り込まねばならない資料群となるはずである。とりわけ前者の場合、近似した複数のヴァージョンの掲載（と比較対照）という点で、従来の紙媒体よりも電子版刊行の方がアドヴァンテージを持つことになるだろう。

<sup>38</sup> *Un caractère de femme* のように冒頭途絶を繰り返した作品も見られる。他方、プレイヤー版に収録されていない途絶断片として、*Une Parisienne*, *Le Secret d'État* (Takayama, op. cit., p. 112, 115), *Souffrances secrètes* (Andrea Del Lungo, « Plaisirs du titre et souffrances du commencement », *Genesis*, n°21, 2003, p. 15 sqq.) などがある。

<sup>39</sup> Franc Schuerewegen, « Avortements (sur les "Ébauches rattachées à *La Comédie humaine*") », in Stéphane Vachon (dir.), *Balzac. Une poétique du roman*, XYZ / Presses Universitaires de Vincennes, 1996, p. 307-317.

<sup>40</sup> *Pl.*, t. XII, p. 653.

<sup>41</sup> 次の論考を参照のこと：Gisèle Séginger, « Génétique ou "métaphysique littéraire" ? La génétique à l'épreuve des manuscrits du *Lys dans la vallée* », *Poétique*, n°107, 1996, p. 259-270.

### 3. 長編小説の未完

バルザックによる本格的な執筆行為の対象となり、一定量の草稿あるいは校正刷りの段階まで進みながらも、ついに完結を見ることがなかった作品もまた複数存在している。最初期の習作『アガティーズ』、『ファルチュルヌ』や、既出の『生彩フランス史』の多くも未了作品であるが、『人間喜劇』に直接関連する作品では『農民』、『アルシの代議士』、『プチ・ブルジョワ』の三作品が最も重要である。いずれも長編作品として構想されながら完結に至っていないが、バルザックは『1845年のカタログ』において完成作品に含めている。そのため、多くの校訂版においてそれぞれが属する『研究』／『情景』の位置に収録され、完成作品と同様に批評的資料が付されている。三作品とも本格的な制作年代は1840年代であり、政治制度、社会階級、イデオロギーの変容といった同時代の社会思想に深く関わるテーマを発展させようとしていた点で共通する。また、バルザックの過去の諸作品で重要な役割を果たした登場人物、すなわち『農民』ではエミール・ブロンデ、『アルシの代議士』ではマクシム・ド・トラージュ、『プチ・ブルジョワ』ではコランタン（デュ・ポルタイユ）らが投入されている。ロラン・ショレはこうした人物を「消滅人物」と呼んでいる。1834～35年の『ゴリオ爺さん』で本格化した人物再登場の手法による個性的な登場人物群の創造と活用の後、後期バルザックにおいては傑出した人物の終焉（キャリアの終わりや死）がしばしば語られているという指摘である<sup>42</sup>。つまり、人物再登場の新たな局面がここで準備されつつあったと言える。三作品の未完により、バルザックの1840年代の重厚なテーマ群をこの手法の新展開のもとに結びつけるはずの太い糸が連結せずに潰えたことになる。そのことは大変惜しまれるが、問われるべきは残されたテキストや関係資料から『人間喜劇』の新局面のポテンシャルを復元していくことである。プレイヤー版による膨大な批評資料の提示はその貴重な手がかりとなる。未完作品であればこそ、それが秘めていたさまざまな発展可能性を可視化できるような生成資料のエディション化、生成批評版が望まれよう。以下、本格的な着手年代の順に三作品の概要と資料編纂上の展望を一瞥する。

#### ・『農民』

『農民』の作品計画は、1833年にバルザックが記した農民による土地の略奪を主題とする *Qui terre a guerre a* に遡る<sup>43</sup>。続いて1835年、大貴族と地元のブルジョワの確執をテーマとする *Le Grand propriétaire* の計画を着想して前者に編入した上で、1838年に制作を開始。題名は *Les Paysans ou Qui a terre a guerre*, *Les Paysans* と変更され、校正刷りの打ち出しが開始されるも進展に時間を要し、1844年12月、『ラ・プレス』紙上において *Qui terre a, guerre a* の題で第一部が掲載された。だが評判芳しからず、連載は打ち切りとなり、デュマ『王妃マルゴ』に取って代わられている。バルザックは第四部まで予定し、第二部までの制

<sup>42</sup> Roland Chollet, « Ci-git Balzac », in Claude Duchet et Isabelle Tournier, *Balzac. Œuvres complètes. Le « Moment » de La Comédie humaine*, op. cit., p. 291.

<sup>43</sup> 次の拙論を参照のこと：« *Les Paysans* de Balzac : leçons de philologie et d'herméneutique d'après l'étude du vicomte de Lovenjoul », in Kazuhiro Matsuzawa (dir.), *Entre la philologie et l'herméneutique*, Université de Nagoya, 2011, p. 83-89. [和文原稿を併載：「バルザック『農民』——ロヴァンジュール子爵の研究による文献学と解釈学のレッスン——」, p. 169-174].

作を進めたものの、そこで頓挫した。自身による書店版のエディションは実現していない。作者の没後にハンスカ夫人が補筆を行い、1855年6月に『ルヴュ・ド・パリ』で初出、同年10月にポテール社から初版が刊行された。モンコルネ將軍の領地エーグを収奪して勝利を収める執念深く暴力的な農民たちの姿を描いたこの問題作は、周知の通り、以後多くの相反する解釈の対象となっている。

ロヴァンジュール文庫に保存されている生成資料は主として各段階の校正刷りである(1839年の校正打ち出し、1841年、『メサジェ』紙掲載版準備のための校正刷り、1844年、『ラ・プレス』用の校正刷り)、『農民』の自筆草稿は一ページしか保存されていないが、*Le Grand propriétaire*の草稿全体は保存されている。ロヴァンジュール子爵は『農民』について著した研究書の中で、これらのうち最重要と思われる資料を転記している。すなわち *Le Grand propriétaire*の草稿、『農民』の1839年の校正刷り(1838年に書かれた草稿に基づいたテキスト)と自筆草稿一ページ、さらにハンスカ夫人が採用しなかった校正刷りの箇所である<sup>44</sup>。プレイヤード版『農民』においても編者ティエリー・ボダンがこれらの資料を収録している<sup>45</sup>。そして、本文については『ラ・プレス』版、『ルヴュ・ド・パリ』版、ポテール版を参照して校合したテキストが採用されている。モンタージュ的な校訂版作成とドキュメントとしての前テキストの豊富な提示により、折衷的な解決策を志向したものである。実際のところ、『ラ・プレス』掲載分以後の部分で『ルヴュ・ド・パリ』に基づく箇所はバルザックのテキストにハンスカ夫人が補完を加えたものであり、両者の執筆箇所を区別することは困難である。換言すれば、我々にはバルザック自身が遺した『農民』の最終形を知るすべがない。かくして、作者自身が完成できなかった作品を事後的な「共作者」の介入による完成体で提示する——「他筆」の介入を甘んじて受容する——という措置が取られているのである。この生成中の作品に未完そのもののダイナミズムを取り戻すには、これらの時期の異なる資料を包括的に採録する「開かれた」エディションが求められよう。

### ・『アルシの代議士』

『アルシの代議士』は1836年以前に記されたと推定される *Une élection* なる計画を源流とする。初老の域にさしかかった往年の伊達男マクシム・ド・トラージュが金満家の娘との縁組を目論んでアルシの代議士選挙に関与する一件を主題とする長編小説として構想が進んだが、複雑な制作上の経緯を辿りながらも筋立ての序盤で途絶えている。初出は『ユニオン・モナルシック』紙で、1847年4月～5月に掲載。読者の不評によって連載は中断し、後続箇所が書かれることはなかった。この初出テキストは作者が関した唯一の刊行版となり、現行の主要な校訂版の底本となっている。バルザックの没後にハンスカ夫人の依頼でシャルル・ラブーが膨大な続編を書いて作品を完結させ、ポテール社から1854～55年に刊行したが、これは今日では顧みられない。

<sup>44</sup> Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul, *La Genèse d'un roman de Balzac : Les Paysans*, Slatkine Reprints, 1968 [1<sup>ère</sup> éd., Ollendorff, 1901], p. 9-36, 51-86, 90-93, 288-297.

<sup>45</sup> *Pl.*, t. IX, p. 1257-1272, 1273-1287, 1350-1351, 1383-1386. ボダンの版はロヴァンジュール子爵の先行研究に負うところが少なくないが、子爵が各資料の欠如部分の一部を仮説的に再構成して掲載したのに対し、ボダンは原資料に忠実な転写を行い、近代的な校訂版に適した対処を行っている。

本作品を論じた研究は全般に少数にとどまるものの、ロヴァンジュール文庫所蔵の原資料に関するコリン・スメットハースト、アンソニー・ピュー、高山鉄男の調査分析によって生成過程の解明が進んだ。スメットハーストはバルザックが三段階の執筆プロセスを経てこの作品の草稿を準備したと論じ<sup>46</sup>、その後、ピューとの共著論文にて自説を部分的に修正し、前著で三段階としたうちの二番目のプロセスに属すべき新たな断片の存在を明らかにした<sup>47</sup>。それによれば、第一段階の執筆は1839年5月～1840年6月に行われている。この時には *L'Élection en province* の題名が付けられており、最終版ではフラッシュ・バック形式によって提示されているデスパール侯爵夫人のサロンにおけるマクシムらの登場場面が冒頭部に置かれていた。第二段階は1842年8月～1843年2月にかけて行われた執筆である。バルザックは1842年8月に *L'Ambitieux malgré lui* なる題名で冒頭部の執筆を試みるもこれを放棄<sup>48</sup>。『アルシの代議士』の題名で作品を再開し、第一段階の執筆で書き上げたテキストの中から一部を再利用して草稿の再編を行いながら制作を進めた。これによって作られたのが、現在『アルシの代議士』の資料体として保存されている草稿である<sup>49</sup>。したがって、スメットハーストはその中に再編以前の旧層が内包されていることを指摘したわけである。そこから4年間の中断を経て作者が本文に修正を加えて刊行したものが前述の初出テキストであり、1847年のこの作業が第三段階となる。その際に用いられた校正刷りは保存されていない<sup>50</sup>。次いで高山は、第一段階の作業に関して、他の関係資料との照合によって1839年の実施の可能性を否定し、1840年、『暗黒事件』の執筆直前の時期であるとする仮説を提示してスメットハーストの説を補正した<sup>51</sup>。

スメットハーストとピューは上述論文において、ロヴァンジュール文庫 A3 の資料体は『アルシの代議士』作成の過程で放棄された数点の断片を集めたものとし（つまり *L'Ambitieux malgré lui* の題名時の関係紙片だけを集積したものではないと指摘）<sup>52</sup>、その全体の転写を提示している。この資料データは、スメットハーストが編纂を担当したプレイヤード版『アルシの代議士』にも引き継がれ、「放棄された冒頭部」の項目建てのもとに冒頭断片が収録され、また他の箇所はヴァリエントに組み入れられている<sup>53</sup>。さらに、『アルシの代議士』の資料体におけるタイトルページも転記され、『暗黒事件』と共通するところの多い登場人物リストを参照することが可能となっている<sup>54</sup>。今後の展望としては、資料体 A55 の草稿本文の転写が待たれるところである。とりわけ電子版であれば、バルザックが草稿執筆開始以後に停滞や紙片の再編を繰り返しながら作品展開の模索を行った過程をさらに

<sup>46</sup> Colin Smethurst, « Introduction à l'étude du *Député d'Arcis* », *AB1967*, p. 223-240.

<sup>47</sup> Anthony R. Pugh et Colin Smethurst, « *L'Ambitieux malgré lui* et *Le Député d'Arcis* », *AB1969*, p. 231-245.

<sup>48</sup> A3, f°2-4.

<sup>49</sup> A55.

<sup>50</sup> これらの情報はスメットハーストによるプレイヤード版の解説に集約されている (*Pl.*, t. VIII, p. 1587 *sqq.*).

<sup>51</sup> 高山鉄男「バルザック『アルシの代議士』をめぐる」、『藝文研究』, vol.44, 1982, p. 31-46.

<sup>52</sup> Anthony R. Pugh et Colin Smethurst, *op. cit.*, p. 232, n. 5.

<sup>53</sup> *Pl.*, t. VIII, p. 1598 *sqq.*

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 1595-1596.



詳しく検証することができよう。『人間喜劇』関連の未完作品の調査における一つの重要なプログラムと言える。

### ・『プチ・ブルジョワ』

この作品の源流は、1843年11年にハンスカ夫人宛の手紙にバルザックが記した *Gendres et Belles-mères* という計画である。これが *Un grand artiste* なるタルチュフ的な偽善者を主題とする作品計画と融合することになる。同年12月から翌年1月にかけて執筆が進み、主人公テオドーズ・ド・ラペーラードの傍らにセリゼ、クラパロン、チュイリエ、コルヴィル、リディー・ド・ラペーラードら多彩な登場人物が配置され、『人間喜劇』の横のつながりを強化しながら作品の射程が広がっていった。バルザックは題名を *Les Bourgeois de Paris*、続いて *Les Petits Bourgeois de Paris* と変更し、『パリ生活情景』に属すべき作品として制作を進めたが、160枚の草稿を書いた時点で停滞し、一度も刊行に至らなかった。『1845年のカタログ』では *Les Petits Bourgeois* の題名で記載されているため、現在ではこれが用いられる。作者の没後にハンスカ夫人が介入し、シャルル・ラブーに後続箇所を書かせて完結の体裁を与えた上で1854年10月に『ル・ペイ』紙に掲載し、翌年、キースリング社から初版を刊行。1856～57年にはポテール社から再版を発行した。後のレヴィ版などもこれに基づいていたが、レイモン・ピカール編纂によるガルニエ版以後はラブーによるヴァージョンを排し、後述のようにバルザックのオリジナル原稿を復元している。

作中では、博愛主義を標榜して貧者の味方という触れ込みによって立身出世を図る若き野心家の弁護士テオドーズが、裕福なチュイリエ家の相続人と目されるモデスト・コルヴィルとの結婚を成就させようと画策に奔走するさまが描かれる。その戦略の一つはジェローム・チュイリエを選挙で当選させるための肩入れであり、選挙の主題、そして自らの栄達のために愚鈍な富者を籠絡しようとする点で『アルシの代議士』とテーマ的類似を見せている。また、セリゼやカーディナル夫人、プピリエといった民衆階級の人物たちが筋立てに絡んでおり、プチ・ブルジョワ（ないしはブルジョワ）と民衆との階級闘争の表象を作者が目指していたこともうかがえる。この点で『農民』における階級間の争いと平行的な様相を呈する。

残された資料は、草稿160枚の中から残存した47枚と、同一段階で長さの異なる校正刷り二組である<sup>55</sup>。校正刷りの短い方に修正の手が加わっている。バルザック自身の校正に加え、没後に介入したハンスカ夫人とラブーによる改変である。プレイヤード版はこのうち、ハンスカ夫人とラブーの「修正」を除外してバルザック自身による最終ヴァージョンを復元した上で、長い方の校正刷りの末尾部分を加えたテキストを編纂している。したがって、オリジナルの原資料の最終段階の転写版を本文としていることになる。バルザックにとってはまだ小説を本格的に組み立てていこうとする初期段階であり、その設定も大きく揺れ動いている。こうして物語の序盤部分しか垣間見ることのできない作品に関しては、草稿段階も含めた一群の資料が検証できるツールが望まれよう<sup>56</sup>。

<sup>55</sup> A186,187.

以上の通り、バルザックにおける未完の問題を、来たるべき生成資料版エディションの観点から素描することを試みた。ここでたびたび言及したプレイヤード版収録の資料群が既に十分豊富なコーパスを提供していると反論する向きもあるかもしれないが、「未完を未完として受容するためのツールの整備」はバルザック研究においてこれから本格的に検討されるべき課題であることを強調しておきたい。

また、ここでは主として『人間喜劇』の作者の熟年期の小説作品の問題に特化したが、「青年期の作品」および戯曲、詩作、論説文における途絶を含めたバルザックにおける未完のエクリチュールを総合的に扱った論考はまだ存在しておらず、依然として多方面の精査を待つ問題系である。

（2020年4月30日受理，5月20日掲載承認）

---

<sup>56</sup> たとえば草稿段階では、作中でコルヴィルが口にする予言的アナグラム——すなわち筋立ての予告——をバルザックがいかに構築したかが見て取れる（A186, f°20r°）。